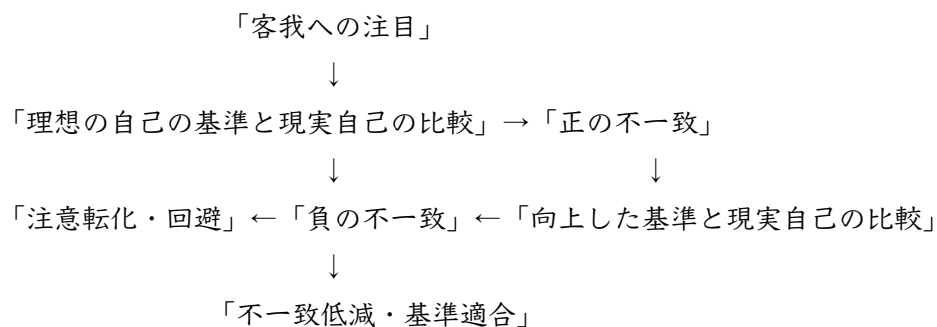


◇ **客体的自覚理論**：自己の側面には、主我と客我がある。

- I (自我、主我、主体的自己)：意識：主体は意図に則り行動→意図がないと責任もない
- Me (客我、客体的自己)
- 正の不一致：理想の自己の基準と現実自己を比較したとき、その基準を現実自己が上回る状態。
- 負の不一致：理想の自己の基準と現実自己を比較したとき、その基準を現実自己が下回る状態。ネガティブな感情を引き起こす。
- 自覚→基準との差異→不快感：西洋は色々目標を持つ→理想像がある
→回避、注意を外に向ける
→自己を基準に近づける



- 鬱の自己中毒：いつまでも過剰に自責、自分を悪いものとして捉えすぎ
表情フィードバック：表情を作れば気持ちがつくれる

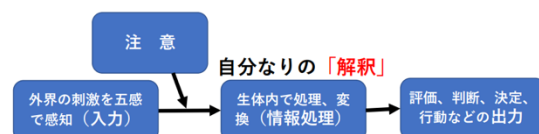
- 1

- ベネディクトの議論 恥の文化 v s 罪の文化
 - ◇ タテの関係 と ヨコ（世間）の関係
 - ◇ 絶対的「善」と相対的「善」
- タングネーの議論
 - ◇ 恥： 自己縮退感 不適応
 - ◇ 罪悪感： 修復的行動、責任←失敗を極度に恐れる
- ◇ **制御焦点理論**：自己を制御して何らかの目標を達成しようとする場合、「達成したい目標に積極的に接近していく方法」と「避けたい結果を招かないように、回避するという方法」がある。前者を促進焦点、後者を防止焦点という。
 - **促進焦点**：成し遂げたい理想を心に描いて、注意関心を焦点づけ、その目標に接近していく制御のやり方。
 - **防止焦点**：果たさなければならない義務の履行に失敗することを恐れ、失敗の痛みや罰・不快を回避することに焦点を置くやり方。

社会的認知

- ◇ 行動主義から認知的アプローチへ
 - 生体内の情報処理を扱う方向/ブラックボックスを推定する/モデル化/推測の方法論の進歩/コンピュータ・アナロジー（情報処理モデル）
- ◇ 記憶の偏り
 - 自分の関心にしがたって、注意点や記憶される部分は異なってくる。
 - 日常の経験→すべて覚えているわけでない。部分的な記憶。それは自身との結びつきや感情的な色彩などの影響が見られる。

プロセスで考える 記憶の(自動選別)



多くの「情報処理」は脳内の脳神経システムの作動によって、物理化学的(実体的)に支えられている。

◇ 矛盾情報再生優位現象

- 事前に与えられた情報精緻化処理がなされ偶発再生の際に再生率が高い。
 - 再生：経験したことを思い出すこと
 - 再認：問われたものが経験したものであるか確認すること
 - 偶発再生：事前に覚えるよう指示されていない状態での記憶再生
- ◇ 対人認知と印象形成
 - 他者についての印象を形成するしくみを探究 / プロセス（流れ、時間順）に着

目

- 人は客観的な認識をすることが難しい。
- 日常では、多忙でいてねいな対応ができない。
- 記憶の偏り：人間は自分の関心に従って認知対象を見るため、視点が異なれば注意点や記憶される部分も異なってくる。

☆ 視点とスキーマの影響

- **スキーマ**：認知心理学の概念。ある事物について集積された知識の共通した部分を抽出し、抽象化・一般化した知識の「枠組み」。
- もの、ひと、出来事などそれぞれのテーマ毎に個々の「スキーマ」があり、豊富なスキーマを持つ人も貧弱な「スキーマ」を持つ人もいる。
- 人の知識の違いを反映

☆ アッシュの印象形成実験

- 他者に関する情報を特性語で与え、その他者の全体的印象(好感度)を解答させる。
- 印象の形成を左右する中心特性であることを示した実験。
- **特性**：「慎重な」「寛大な」「賢い」などの能力と性格を含意した概念。特性には「誠実さ」「情緒安定性」「調和性」「新奇性」「外向性」の5つの次元がある。
- **中心特性**：アッシュが提唱した。全体を統合する印象を成立させ、個々の特性の意味内容をこの全体印象によって規定し、異ならせるような特性。(⇔周辺特性)
- →特性の認知的内容は、それを取りまく他の特性との関連において決定される。

☆ 情報处理的アプローチ

- **社会的認知**：対人認知、自己、態度の領域について、**認知の表象＝記憶システムという観点から、情報处理的な捉え方**が導入されるようになった。
- スキーマ、知識のネットワーク、活性化、符号化、想起、**精緻化处理**などの概念、記憶再生や**反応時間**測定などの方法的技術が導入された。
- 「活性化（概念が想起しやすい状態になること。概念の活性化と動機の活性化がある）」はアクセシビリティ（**接近可能性**）という概念を通じて、情報利用、判断、**評価**といった現象に適用された。
- 意味ネットワークモデル(活性化拡散モデル)：記憶内で様々な概念はネットワーク状態で互いに結びついているという考え方。1つの概念は1つのノードを形成し、意味的に関連するノードはリンクで結ばれていく。
- 活性化拡散：ある概念が活性化すると、それと結びついている近隣の概念もみな活性化していき、活性化が伝播・拡散していくという考え方。

☆ **精緻化処理**：報をより正確に認識するために脳が行うと考えられている処理。

- 精緻化処理は3つの段階(形態的処理<音韻的処理<意味処理)がある。人間は認知的節約家であるためより浅い処理で理解しようとする。
- 形態的処理：大文字/小文字 浅い処理
- 音韻的処理：韻を踏む ↓
- 意味処理：文への適合 深い処理
- 深い処理ほど脳の仕事密度が高い→記憶に刻まれやすい

認知的不協和：ある状態に陥っても自分の状態を合理化することがある。認知的な歪みを使って辛いことを許容してしまう→幸せとは何か？人は差別されても幸せになれるのか

☆ **ステレオタイプ**

- 自動的に形成される、ある集団に対する決まりきったイメージ
- ある社会集団に対して過剰に適用されがちである。
- ポジティブなステレオタイプとネガティブなステレオタイプが両方存在(両面価値的ステレオタイプ)する。
- 期待効果（予期効果）：先入観

☆ 両面価値的ステレオタイプ

- ☆ 多くの場合、ある集団に対して「人柄の良さの側面の善し悪し」と「知的能力の側面の善し悪し」の組み合わせからできる。→ステレオタイプ内容モデルと集団間情動

☆ **マイノリティ偏見**(マイノリティバイアス)：錯誤相関によって生じる。無意識的に起こる認知的傾向。マイノリティの悪い行動の度数を過大に評価してしまう。

☆ **錯誤相関** 実際には無関係な性質を連動させてしまうこと。

Ex. 血液型性格診断

☆ 職業ステレオタイプ→Cohen (1981) の実験：ウェイトレス vs 図書館司書

- 先行情報に基づく事前イメージが果たす役割
- スキーマやステレオタイプに合致した情報は、記憶が促進される（覚えやすい）
- 「整合情報への着目」>「矛盾情報への着目」

☆ 人間は、**スキーマやステレオタイプに当てはまる情報への着目度が高い(信念バイアス)**

ス）、信じたいことを信じてしまう(仮説確認バイアス)。

- Ex. 血液型ステレオタイプ
- 信念バイアス：結果が正しければ過程もすべて正しいと思い込む効果、または結果が間違っていれば過程も全て間違っていると思い込む効果
- 仮説確認バイアス：自分の思い込みや願望を強化する情報ばかりに目が行き、そうでない情報は軽視してしまう傾向
- 予言の自己成就：仮説確認バイアスが親などの影響で強く・長期的に作用すると実際に自己認知が変化してしまう。

☆ ステレオタイプと記憶

- あてはまるものに着目しがちである。
- あてはまっていた事例、エピソードが記憶に残りやすい： バイアスのある記憶
- 行為の主体の記憶の方が、行為自体の記憶よりもあいまい→ステレオタイプによる主体の取り違え

☆ ステレオタイプ内容モデル

- フィスクらが集団のイメージを「温かさの次元」と「能力の次元」でとらえたモデル。
- 人々のイメージの中では、実際には非常に薄い関係を、幻想的に相関関係（負の相関）があるように認知している（競争は冷たい、協力は暖かい）
-
- 敵対的差別⇔温情的差別
- 今生きている世界のシステムの崩壊が日常的な脅威となるので、根源的な安寧感を維持するために現システムを正当化

☆ 人をどうして好きになるのか

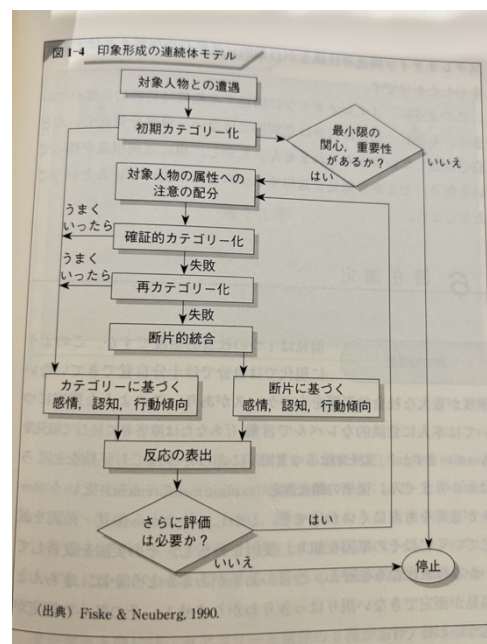
- ライキニング：その人と友になりたい、近づきたい
- リスペクト：その人の能力をすごいと思う。能力の高い人がいると社会の危機を救ってくれるかもしれない。
- 理性（動物とは違う「人間らしさ」）：頭は良いが温かみがない→自己利益を追求する人
- 人間性（温かみ）：利他的な人（温かみがある人）が好き/孤独を嫌う→死ぬリスクを遠ざける

☆ IAT(Implicit Association Test)=潜在連合テスト

- 概念間の連合強度を利用している。
- 語を提示し、それが事前に与えられた 2 つのカテゴリーのうちどちらに属するかを判断させるテスト
- 意味的な関連が強い語の組み合わせの場合(例えば「男性」と「工学」)のほうが、そうでない場合と比べて反応がスムーズで早い。
- 信頼性と妥当性に優れる。

☆ 連続体モデル

- 直観的なカテゴリー化から、ていねいな印象形成までの連続体（グラデーション）がある。友達や親兄弟の印象は詳細である。
- 確証のカテゴリー化、下位カテゴリ
- 個人依存型処理：その人物の情報がボトムアップ的（帰納的）に統合され、個人化した印象が形成される（熟慮的处理）。その人物の社会的カテゴリーは、多くの情報の中の一つとして扱われる。
- カテゴリー依存型処理：まずその人物を位置づける社会的カテゴリー（ステレオタイプ）との照合が行われ、照合は抽象度の高いカテゴリーから行われる（自動的・直観的处理）。その人物とカテゴリーの特徴が一致すればそのカテゴリーに位置付けられ、一致しなければより抽象度の低い下位カテゴリーへとトップダウン的（演繹的）に照合は継続される。



二過程モデルが改善された概念。未知の人物に対して、まずカテゴリー依存型処理が行われる。そこで相手への興味・関心・関連性が感じられなければ、カテゴリー化は終了する。感じられた場合、活性化したカテゴリーと相手の特徴の照合がなされ、一致しなかった場合は別のカテゴリーとの照合を行う再カテゴリー化が行われる。再カテゴリー化でも一致しなかった場合は、個々の情報をボトムアップ的に統合して印象形成がなされる。再カテゴリー化の段階でいずれかのカテゴリーに一致した場合は複数のカテゴリーに依存した処理やサブタイプ化など、より複雑な処理が行われる。カテゴリー依存型処理は認知資源の消費が少ないので認知資源を節約できるため理にかなっている考え方である。

感情と認知

☆ 感情の役割、機能

- 感情は緊急事態を生体に知らせるシグナルである。状況への自動反応の総体を我々は「感情」と名付けて呼んでいるに過ぎない。
- 驚き：新奇な対象に遭遇した時に生じる情動。新奇な対象を知るために瞳孔と目が開く。
- 怒り：行動、目標への妨害。対象の認知が要るから目を見開くが威嚇も生じるので目を見開かない。
- 悲しみ：喪失によって生じる心理的ダメージへの対処反応。
- 嫌悪：化学的危険に反応する情動。
- 恐怖：物理的危険に晒されそうな時、それを予測して生じる情動。
- 適応システムとしての感情：情動反応は自動対処。

感情は一連の身体的システムである。

身体＝からだ、生体内物質、脳すべて含む

全体的にどのようなシステムが活性化し、稼働してるか＝“感情”状態

q 人間の認知機能はアルゴリズムで再現不可能

☆ 強い感情と弱い感情：自分で気づいている感情の意識：感情 (affect) はすべての総称語。

- 情動(emotion)：感情の原因が明確で、一時的な反応として生起する強い感情
- 気分 (mood)：やや持続的で背景的な fr っ t
- 感情 (feeling)：主観的な感情経験（自分の経験の解釈）

☆ 感情情報説

- 何か判断を行うときに、自分の感情・気分を参照する。＝感情が判断の基盤になる。
- 判断が元々感情的な性質のある/他に使える有用な情報がない/熟慮的な判断をこなすには難しすぎる/タイムプレッシャーなど認知的資源の制限などの時、自己の感情状態を判断の基盤にする。自分自身の感情に注意を向ける個人差アリ。

☆ ネットワークモデルとの差異

- ネットワークモデルでは自動的に活性化拡散していくので、常に感情と一致した情報の利用可能性が高まる
- 感情情報機能説では、感情が情報源として働かなくなる場合を想定する→感情に自覚的な場合、その適用を避けるべきだと考える場合など

☆ S c h w a r z の実験

- 晴天（ポジティブ）と雨天（ネガティブ）では、生活満足感は晴天＞雨天。けど天気が感情に影響を与えていることを自覚化すると感情の影響は無くなった。
- 自分の感情を対象から喚起→されるものと誤帰属が生じる→修正して誤帰属を正す

☆ E r b e r らの感情改善の実験：気分誘導

- 従属変数：新聞記事を示してどれを読みたいか選択（ポジ、ネガ）
- この後、人と会う場合などに、気分をクーリング（クールネス効果）
- ポジ気分の人は悲しい記事、ネガ気分の人は楽しい記事を選んだ
- 社会的制約による説明：何か制約的な出来事（きちっとしなければ！）があると、
気分をニュートラルに戻す

感情と情報処理ストラテジー

気分の機能

☆ ポジティブ気分

- 環境が良好であることのシグナル。
- 対処の要請がないため、自動的な反応、拡散的な思考、ヒューリスティックの利用などを促進する。
- 自動的な処理方略（ヒューリスティック処理）：おおざっぱな処理ミスもある

☆ ネガティブ気分

- 環境に問題があることのシグナル
- 解決のための注意深い処理、意識的な対処、熟慮的、集中的、分析的思考を促進する。
- 統制的（コントロール）処理方略（分析的・体系的処理/システムティック処理）

生体内物質

感情にも生物的要素がたくさんある。

身体は脳一極集中というよりは、局所で解決できることはする。

感情はかなり古い進化。割と反射的に感情を返すこともある。

人は感情で判断・行動←感情を作るのは物質←物質を作るのは遺伝子

協応動作：

人間の脳は可塑性がある＝柔軟な学習ができる。

意識的過程のほとんどすべては、脳神経過程に依存している。

その活動を支えるメカニズムとして神経伝達物質がある。

身体は適切な量の神経伝達物質を出したいし、身体は賢く反応している、人間の感情思考が追いついてない。

☆ こころと化学過程

- ドーパミンやアドレナリンは交感神経系を賦活し、呼吸や血圧を高め、人体の活動準備を行い、脳神経の働きも活発化する作用をもつ。
- ドーパミンの過剰分泌状態は、統合失調症
- ノルアドレナリンは怒りと関係し、アセチルコリンやセロトニンは精神安定と関連している（抑うつ状態と関連）
- 抗うつ剤：セロトニンの再取り込みを防ぐ→脳内のセロトニン量を増やす
- ADHD コンサータなど：薬物は精神を左右
- 感情状態や気分状態はとりわけ身体の影響を受け（実際、身体状態のモニターとなっている）、生体内物質の濃度によって気分が変化する。
- 麻薬によって気分変化、精神変化をするのだから、こうしたプロセスが存在するのは至極あたりまえ→精神安定剤や抗うつ剤は、化学的薬理として処方できる

☆ 性ホルモン

- 女性ホルモンは男性にもあり、男性ホルモンは女性にもある。
- 性を分けるホルモンと捉えすぎると実態を正確に捉えられない。
- 一般に、男性ホルモン側に分類される**テストステロン**は攻撃性を高める。
- **エストロゲン**は協調性を高め、**オキシトシン**は共感性や養育行動、擁護心を高める。
・PEA（まだ謎多い） 性欲&報酬系 脳下垂体から分泌

☆ 生体内物質の製造方法

- 人体において都合のよい化学物質（タンパク質やアミノ酸）は、遺伝子によって製造される
- 遺伝子は製造設計図とその物質（媒体）を有し、こうした物質を人体内で製造する。
- 遺伝子＝生体内物質製造システム。消化酵素なども遺伝子が生産
- 遺伝子は「時と状況」によって柔軟に発動する。
- 血糖値が上がる→インシュリン生産、分泌
- 消化機構・神経機構が心・行動面に関与しないわけではない

- これらの一連のプロセスは全くの無意識下で行われていて、自分で遺伝子の働きや、生体内物質の変化を知ることはほとんどできない。
- 自律的、自動的に人体は生きている

遺伝子

遺伝子「Gene」=新しいものを生成して伝える（イメージ）

☆ 遺伝子とは（遺す??）

- 生体内物質製造工場（プログラム兼物質）
- 物質的側面（化学組成と情報の側面）：情報でありカタチ
- 3つ組でアミノ酸に対応：RNA でコピー
- 環境（状況）スイッチをもつ。条件をチェックする遺伝子部位あり。特定条件の下にコピー製造を開始。（適切なからだの部位）
- 消化、免疫系など「こころ」についても。 ↑参照
- ドーパミン、アドレナリン、アセチルコリン、性ホルモンなども

☆ 遺伝規定性

- **遺伝规定的**=自分の固有の遺伝子配列にしたがって、規定される性質
- 兄弟と共通だった部分： **共有環境の影響**
- 兄弟と共通でなかった部分： **非共有環境の影響**
- 自分の固有の遺伝子配列に従って自分の性質が出来上がる

☆ 遺伝子の独自性

- 組み合わせの問題である場合と、そうでない場合（単純、優勢性、メンデルの法則）。「組合せ」は唯一無二
- 遺伝子の組合せには自由度（振れ幅、グラデーション）がある

☆ 遺伝×環境交互作用 ：年齢経過/人的環境/集団の特質/気候、風土/顕性、潜性



遺伝規定性/共有環境/非共有環境は様々なバランスで色々に関連する

処遇は教育：叱り飛ばさないで、行動形成する。処罰ではなく、教育/再教育/適応増大

他行為可能性：職業訓練 社会復帰 自己制御 感情制御

共通環境(家庭環境)の影響は小さい、学校やクラブなどの非共通環境が重要

血縁の過剰期待

子どもも「他人」であると、精神的密着 から解放されることが大切。

互いの存在に過剰に依存しないこと。

進化的アプローチ

☆ 生物進化

- 進化とは進化的適応環境に適合していく変化過程。
- 進化に善悪・優劣はない。
- 進化で重要な点は環境に適合することであり、環境が変動すると適応性(適応度)も変化する。ヒトが最も高い適応度を持つわけではなく、適応戦略は多様で優劣はない。「自己」も進化の対象である。
- **遺伝子環境交互作用**：1つの遺伝子は進化的な優劣を含めて多重な役割を果たし、その効果は環境文脈に依存する。
- 進化による、ある種内でのある特性のシェアの変化は「結果」であって、生存のために「意図」されたものではない。遺伝子が「生存」のため従っているのではなく、生存性に富んだ遺伝子が結果的にシェアを拡大しているにすぎない。

☆ 種内での進化：シェアの変化

- 今の環境で生きやすさ $A > B$ なら A の系譜が増えてく
- サバイバル性に富んだ遺伝子が結果的にシェア拡大しているに過ぎない。
- **究極原因**：ある行動傾向の進化的理由。根源的なサイエンスに基づく行動傾向の進

化的原因。

⇕相互補完

- **近接原因**：ある行動傾向のメカニズム。本人がその場で自覚していたり、あるいは通常心理学者が検討してきたような行動の原因（行為者本人が自覚、意図している必要はない）。

イメージ 遺伝子ができること＝単純な行動しか用意しない

2つの進化プロセス

- ☆ **自然選択(自然淘汰)**：長期間にわたって自然界での生存競争の中で進化。
 - サバイバルによる / 時間がかかる
 - 文明化すると必ず少子化する。（多産の魚類→胎生の哺乳類へ）
 - 目の進化 / 雌雄二型 / 表情 / ことば（発声メカニズム） / 親指 / 白目 / 群居性 / 協力関係 / （サバイバルの相対性：環境に適応する）（内向と外向、ニッチ）
- ☆ **性選択(性淘汰)**：異性をめぐる競争を通じて起きる進化。適応度指数＝繁殖度
 - より短期間に進行する / ランナウェイ仮説 / ハンディキャップ原理
 - （サバイバル上利点にならなそうな形質・性質をあえて拡大進展させる形質を性淘汰といい、この仕組みをハンディキャップとする）
 - ・生存力の魅力＝身体能力、体型、健康など
 - **生存競争上利点にならなそうな形質、性質→ハンディキャップ原理**
 - サバイバル力の指標に転換可能
 - （くじゃくの飾り羽、鳥類の色、さえずり：**通常のサバイバルには不利な特性が敢えて進化**）
- ☆ 動物における淘汰圧の性的非対称
 - 哺乳類：妊娠期間がある
 - 雌雄二型がほぼ1：1ならば発情期や妊娠の問題で、常に性繁殖可能な状態は、オスの個体数 > メスの個体数 → **雄間競争**が生じる
 - 力での争い→ オスのからだの増大
 - 群れの形態と雄雌体積比率との相関（日常的な競争が熾烈になる程、増大）
- ☆ **雄間競争**：雌雄二型では通常、オスの方が人口的に余る
 - 力での争い→オスの体の増大、群れの形態と雌雄体積比率との相関（一雄多雌）

☆ 脳の進化—協力の必要性—

- 子育て期間の遷延化 → **子育て期間の協力の必要性**
- (人間は不完全な一夫一妻制。繁殖で異性を支配する動機は男>>女)
- **協力**の進化、やさしさ(互惠的利他行動)の進化の一因(一夫一妻で他の男と戦わない)
- 共同の必要によって男性側のロスが発生(強さよりも共同性、やさしさを持つ男性の不足)・「女性選びの」の発生 → 男女の「相互選択」の世界へ。
- (Ex 妊娠: 何度も性行為を行う必要あり→長くパートナーシップを保つタイプの遺伝子を持つ方が遺伝子を残しやすい→飽きっぽい人は避けられる)
- (評判システム: 社会的排除は命取り。裏切り、規範逸脱行動をとると制裁される。信頼を得て、評判を高めることは適応度を向上させる。(配偶者も得られやすい))
- **利他性の進化・やさしさの進化(共同性と作動性)は、社会の中で変化してきた。**
- Cf)「脳」はクジャクの羽飾りのように、「賢さ」「巧緻性」「戦術」の高さが重視されたために学習できる力を進化させてきたという説もある

☆ 各々の重みづけの差異

- 繁殖可能性の非対称: 女性→若さ/男性→子育ての協力、庇護→資産の必要性から、社会経済的地位が求められる。
- 繁殖可能性: 若さ・健康↓
- **ヒューリスティック**: 人が判断や意思決定をする際に無意識的に使っている法則や手掛かり。ほとんどの場合、経験則に基づく。その判断が正しいとは限らない。
(≡周辺手掛かりに影響されて態度変化に及ぶ周辺ルート)
- **ベビーフェイス効果**: 保護の対象、未成熟の強調。美人／かわいいの2因子構造(日本)。

☆ 包括適応度と性選択(性淘汰)

- カップルを成す: 配偶者選択←意識的理由と非意識的理由(遺伝子の都合は増殖)
(増殖の結果、その形質が広く分布する)

エラー管理理論

☆ 嫉妬の進化: 配偶者保持の戦術

- 相互選択の相手を自分の元にとどめておく戦略
- 2つの嫉妬(からだの浮気、こころの浮気)
- ネガティブな側面: DV, IPV
- 嫉妬が強い反応を引き起こす→それほど配偶者を長期的に保持することが重要

	脈在りだ	見逃す
好き(気がある)	あたり(Hit)	Error (もったいない)
好きでない (気のない)	False Alarm (ストーカーへ)	Correct rejection(正解)

男は避けたい

女は避けたい!

望まない妊娠、子作り逃げ、浮気!

☆ 脳の進化（J.ミラー説）

- 脳のはたらき：学習できる力の進化（頭のよいこと、賢いこと、巧緻性、戦術）
- かしこいことを理解するには、かしこい脳が必要。
- 男性も女性も、ヒロイックな身体的リスクテイカーは配偶相手として好むが、単なるリスクテイカー（危険なスポーツなど）はむしろ好まない。

☆ 「愛情」の進化・

- 共同子育てが男性をつなぎとめるべき使命としたら、「子作り逃げ」する男は避ける
- 「愛情」の確認：相手の自己に対する**ためらわない絶対的な投資＝「愛」**の確認が必要
- 以前は「家」のしがらみ/親族関係による足かせがあった
- より困難な課題を提示し、乗り越えるところに「能力」が表出され、選別できる
- 「できる子」競争・
- 金、物品、労力、情報、地位、愛情

☆ 短期 v s 長期繁殖戦略

- **長期配偶戦略**：長期的なペア・ポンドを形成するための心理的メカニズム
- **短期配偶戦略**：長期的関係を前提とせずに異性と性的関係を持つこと。(Ex 浮気)
- 男性の方が短期配偶戦略に積極的
- 哺乳類、特に人類は他の動物と比較すれば**少産少死戦略**
- 集団内で比較すると、**太く短く戦略**と**細く長く戦略**があり、次世代への繁殖への労力投資をめぐって、**短期＝労力投資小**、**長期＝労力投資大**という2つの戦略を区別することができる。
- 親和性、親族、養育、計画性

☆ 進化の非意識性

- **近接原因**：通常の世界で原因とされることが因果関係が分析されるような事象（当事者が意識することもしないこともある）
- **究極原因**：適応的な機能。善悪の問題ではない。
- 「現在」をもたらしたのは間違いなく過去の繁殖の結果。一度獲得された性質は他の用途に使い回されることがある。

☆ 性差

- 科学的には個々の生体内 物質分量の個体差の問題＋環境から学習された性役割

態度

- 個体差が大きい。

☆ 人のこころの意識

- 進化で獲得された機能はほとんどが非意識だが、人間においては、「意識」も進化
- 意識の使用は進化の結果で、「進化の流れ」に逆らうことでもない。
- 非意識出力と意識出力がある
- 意識的に調停して、よいと思う判断や行動選択をすればよい。
- 効果的に実施するためには、対立する非意識圧力を知る（敵を知る）必要がある。
- わたしたちが住みやすい、生きやすいと思う社会イメージがあるなら、それを達成するために意識的努力を払ったり、約束事（法律や制度など）を準備するのは適応的で、正しいことである。

行動の原理をわかること → 対策可能とする

文化と関係流動性

文化：長い間ある環境にいることで形作られるもの

↑環境状況の分析

文化と個人の相互作用(文化に影響され、文化を形作る)

☆ 集団移動の容易性：他集団と遭遇する蓋然性

- 地理的・環境的問題：通常は、大きく「国」を分ける・
- 山や川などで隔てる集団（希、伊、中欧、印）
- 平地内に並立する多集団（欧州、西アジア（砂漠の難関）、中国）
- 日本では「村落」を分けた（異常に多数の山川、平地の狭小）

☆ 流動性

- 山が多い、川が多い→行き来しにくい、流動性減→新たな関係が生じにくい
- =関係流動性減少。顔見知りだけの世界→監視と息苦しさ／安心
- 秩序性（社会規範が多い）=災害が多い tight society

☆ 集団との付き合い方

- 個人 v s 集団のバランス・
- 自身が適応する集団を 自分が選ぶ v s 与えられる =関係流動性 高 v s 低

- =異なる集団を選ぶ v s 選ぶ余地がない（**移籍のコスト**）
- 集団移籍に伴う活性化

- ☆ 関係流動性の高低
 - 交流しにくい環境・風土で長い間暮らす。=共同体は安定的。メンバーは固定。
 - 顔なじみ → “安心”社会：裏切るのはコスト大
 - 集団の移動が困難である場合は所属集団に適応、同調することが最も合理的解となる。
 - =反社会的行動は損。（社会的排斥の状況でのやぶれかぶれ）**和の形成**
 - 人の「中身」を問題にしない社会

- ☆ 関係流動性の高い場合： 所属集団をスイッチできる。（イヤなら出て行くという選択肢）
 - 初対面→交渉のリスク大/交渉しないと死滅/交渉や協力が成立すると利益大
 - 人を信頼できるか見抜く目を育てる：“**信頼**”社会
 - 有能であることを自己呈示する。→**主張性** 自己宣伝 個の強調 成功追求（促進焦点的）
 - 能力主義の社会

- ☆ 相互依存、関係流動性の低いとき
 - 集団のなかにある自分という位置づけ / 人間関係や集団のなかで果たすべき役割がある。→周囲の評価を気にする。役割を全うすることに充実感を求める。
 - “役割全う”チェック=自己批判、**不安になりやすい**

- ☆ 関係流動性に影響するのは？
 - 移民・都市化 / 集団所属の希薄化 / 終身雇用の崩壊（変化） / 家庭関係の流動化（離婚、再婚、ひとり）
 - グローバル化によって日本も流動性が高まる方向へ
 - 言語化、主張性と人を見る目、能力の呈示と承認、リスクの理解へ。多様性承認

- ☆ 階層による差
 - 高い・・・関係流動性も高い / 低い・・・関係流動性も低い
 - 価値観、生活態度等も現在は、国間より階層間で差があり、同階層で類似している
 - 英米の個人主義：相互独立性 / 日本の個人主義：批判的、他人の顔色を見る

- ☆ 見直すべき集団教育(再生産)

- 集団一斉教育 / 場を乱す者の排除（発達障がい）
- 努力・根性重視の**精神主義** 反知性主義
- 安定したクラス維持→流動性を高めるよう変える
- ↑今の教育は流動性だけでは説明しきれない「**日本的な価値観**」「**ものの考え方**」
- ↑西洋とは異なるあり方の社会構築の可能性も。資本主義でも社会主義でもない
未来の第3の道 **From Asia**

テーゼ1 社会文化技術が進展すると広い地域活動が生じ、他国との交渉・相互作用が増えやすくなる。

テーゼ2 世界規模で広い交渉が行われると、他者との交渉に積極的な態度を持つ者や主張的な者たちの方の意見が反映されやすくなる。

テーゼ3 世界規模で樹立された規範にのっか らないと国際的な経済社会において利得を得ることが難しくなる。

おまけ：期末テストで聞かれたこと（作成者のうろ覚え。参考程度に。問題は試験後に回収されます）

- ◆ 〔一問一答〕 ～～とは何か？という形式（促進焦点、関係流動性が問われた）
- ◆ 〔語句〕について3～5行で説明せよ（確か公的自己意識特性が問われたはず）
- ◆ 〔記述〕IATテストとは何か、またIATテストの利点について（確か8～12行）
- ◆ 〔記述〕関係流動性について説明（確か8～12行。IATテストについての問題と選択）
- ◆ 〔記述〕遺伝子について、男女のパートナーの選び方、相手への対応など（そんな感じの問い方でした、そんなに覚えていないです）。
- ◆ 〔語句説明〕：恐怖、テストステロン、オキシトシン、あと一つ何か（忘れた）から2つを選んで説明。
- ◆ ※かなり記述を強いられます。

さらにおまけ：講評

1, 2年生すべての採点を終えました。平均点72点です。妥当な数値です。最高点は97点でした。

小課題は、採点の手元のエクセルに直接入力してってしまったため、ごく初期に記していた以外、ここ itc-lms 上では得点が見えません（示し得ていません）。すいません。

減点が大きいものの講評をしておきます。

基本、例だけでなく、できるだけ専門用語を用いた説明が高得点になります。したがって小問の例では、公的自己意識特性を説明するのに、公的自己の説明や私的自己との対比や自覚との違いなど説明があることがより望ましいです。

自覚が状態であり、自己意識特性が特性であるという、状態と特性の違いをよく認識されていた人は必ずしも多くありませんでした。得点がそれほど低くなるわけではありませんが、状態として終始説明されている場合は、2点ほど引かれる感じです。

恐怖についても、ただ、危機に対する反応というだけでなく、物理的危険に対する反応と明示していると完全点になります。なお、いずれも「間違った説明」が含まれていると、それ以外が十分説明していても引かれています。

さて、減点が大きかったのは、Ⅳの性淘汰に絡むディスプレイでした。近年、共通テストで数学や理科さえ、問題文をよく読ませるという動きがあり、過剰なものはちょっとどうかと思っていますが、ここではさしたるほどもなく、

1. ディスレイ行動を男女とも示せ 2. そのメカニズムを記せ でした。問いがわかっていない人が結構いました。片方しかない場合、半分くらいの 7-8 点になっています。時々現象ばかり書いて、「なぜ」の仕組みがなかった人がいます。

また、「その方が魅力的だから」「女性は〇〇が好きだから」「経済的地位が高い方望まれるので」とだけ記しても、その「なぜ」がないと減点です。進化の見方は、日常の当たり前に見えているところの「なぜ」という仕組みを深く説明しようとするものなので、当然のように〇〇は〇〇が好きだから、いいからと言っても、進化的アプローチの求めるメカニズムの説明になりません。ここでは、繁殖につながるところまでの記述が書いてなければ、7点くらいは引かれます。

さて、問いをきちんとわかっていない人の解答の代表は、男性が〇〇が好き、〇〇に魅力を感じる、女性は〇〇に魅力を感じるといった書き方でした。実質さしてとりあげられた現象が、間違っていなくても、それは聞いていません。

聞いているのは、何に魅力を感じるかということではなく（もちろんメカニズムの説明でそれを書いてくても構いませんが）、どう、何をディスプレイするか、ディスプレイする側の主体的記述です。

ハンディキャップ原理として暴走する、無茶をすとか、知ったかぶりをすとかでもいいですし、それは頑健さや頭のよさを示し、それは・・・と、きちんと繁殖の促進につながることを説明しつつ、経済的な問題を記すなどです。腕時計とかでもいいです。仕組みの説明は重要ですから、現象、行動だけではなく、それを通して、生まれた子の生存可能性を高め

る働きがあるということを明示する。女性の場合など、化粧など、若さや健康の強調は、「健康」だけではなく、それが繁殖力を示すことにつながるという記述まで必要です。

それで、「示す」ことでなく、魅力を感じるという書き方だけで終始した解答は3点くらいとなっています。そもそも質問に答えるのを失敗しているからです。ここがたぶん「自分は書けていたはずであるのに、思ったより点数、成績が悪かった」としたら、もっともあり得る話で、12点くらいここで引かれています。また、ご自分の想像だけであてにならないことを書いている場合も、数点引かれています。このあたりはなぜか、1年生のみなさんの方が相対的にそういった間違いが少なく、2年生によく見られていました。1年生では間違いひととそうでない人で二極化して、優以上が40%の一方、可が25%と多かったです。50点代の人も多かったです。2年生では、優以上が30%程度でした。良が多かったです。

またIATも「方法も書くこと」になっていますので、検査の仕組みについてきちっと書かれていなければ引かれています。また基盤の仕組みも求められているので意味ネットワークモデルなど、理論的前提がまったく書いていないとその分ひいています。

また関係流動性についても、「文化」と「行動、ふるまい」を書けの2点でした。文化としては、信頼／安心、あるいはタイト／ルースあたりが望ましいです。信頼・安心のキーワードが全く登場しないものは減点されています。

また、行動がひとつも書かれていなくて、「思うこと」レベルの心理しか言及していなければ、そこでも3-5点引かれています。行動では主張行動や、非主張行動、同調行動、謙遜行動などが例です。

これら文化と行動が揃っていて満点あたりになります。（間違いが書いてあると少し減点しています）

遺伝子の話は、問題で初めから遺伝子の観点から書けとしていますから、解答で環境の影響を書いているのは、書いていないと同じ扱いでそこはないものとしています。遺伝子について触れている文章だけ採点しています。

なので、2つあげるのに、一方が環境の影響であつたら、10点中5点となります。おもには、遺伝子は両親からそれぞれもたらされるものの「組み合わせ」であることの説明、組合せによって決まる性質はそもそも組合せが

親と異なり得るということで、そして、分布のことで、多い解答は、知能が2人とも高い両親でも、子どもの期待される値は、回帰されて分布しますから、期待値としてはより低い平均値になることなどを説明していれば足ります。

以上、どこかで、足りない解答が多く見られましたので、ここに記しておきます。

